



母乳除霊師は恋を知らない

～元クズイケメンですが、
母乳で**除霊100**体しないと
元の世界に帰れません～

第1巻

第一話 乳が出た!?

「お前、いい加減にしろよ!」

「いつ……!」

頬に重い衝撃を喰らい、朝比奈蓮^{あさひなれん}はじろりと目の前の男を睨みつけた。

長い前髪の間隙から見えるこの男は、確か同じ大学の先輩だったか。

告白をされて付き合うことになったものの、イマイチ印象が薄くて名前すら思い出せない。

(顔殴りやがったなコノヤロー)

今日はただでさえバイト先で「俺の女に手を出すな」だの「こういう面倒事は困る」だの、散々ムカつくことを言われて虫の居所が悪いのだ。

(俺から手え出したんじゃないやねえっての)

男ふたりの険悪なムードに、通り過ぎる人々が「バカな学生の喧嘩か」と迷惑そうな視線を向けてくる。そしてそのほとんどが、蓮の顔を見て顔色を変えた。

「ねえ、殴られた方の子、すごい顔良くない？」

「どつかの地下アイドル？」

「ちっ、うるせえな！」

「きやつ」

好奇の視線を男が舌打ちで追い払う。

二十二時を過ぎたとはいえ、駅が近いこの道は人通りが多い。そりゃあ人にも見られるだろうよ、と蓮は呆れて息を吐いた。

「で、何で俺殴られたの？」

「何でじゃねえよ！ お前が浮気したからだろ！」

「浮気？　してねえよ」

「だったらこれは何なんだよ！」

「あ？」

目の前に突き出されたスマホの画面には、ふたりの男の姿が映っていた。ひとり蓮だった。キャップを目深に被っていてもすぐ自分だとわかった。もうひとりの男にも覚えがあった。

今日、痴情のもつれでクビになったバイト先の店長だ。

この日は確か、バイト先の飲み会があつて終電を逃した奴らで集まつて店長の家に泊まつたはずだ。蓮以外の男もいたのだが、写真には映っていない。「俺の後輩がこの写真を送ってきたんだよ」

だから何だつて話だ。

蓮はひどく投げやりで暴力的な気分になっていた。

バイト先でも似たような修羅場を終えてきたばかりなのだ。

今夜はもう、さつさと家に帰つて寝たい。

「面倒くせえよ、お前。今日で終わりな。ダルいから連絡してくんなよ」

「は？ ……は？ おい、待てよ、蓮！ ……ぐッ！」

さつさと踵を返した蓮の肩を掴んだ男を、振り向きざまにブン殴った。

無様に尻もちをついた男は、何が起こったのかわからないという顔で蓮を見上げる。

「お前の代わりなんかいくらでもいるんだよ」

低く吐き捨てると、男はぐしやりと顔を歪めた。

蓮を好きになる人間^{やつ}は、最後にはみんな同じ顔をする。

（どうせ、俺の気持ちを確かめたいとか縋りたいとか、そんなところだろ）
気持ち悪いな、と呟き、さつさと歩き出す。

きつと男も、あんな写真一枚で浮気だと信じたわけではないのだろう。

殴ってまで責めたのは、蓮を独占したかったからだ。

女からも男からもモテる蓮からの愛情を独り占めしたくて、馬鹿な言いばかりをつけたのだ。それが余計に蓮の心を遠ざけてしまうとも気づかないで。

「あー、いってえな。クソ。クソクソクソ」

痛む頬に苛立ちながら、街灯の下でスマホを開く。

いくつもついていた通知の中に『斎藤さんと別れたんですか?』というメッセージを見つけ、そういえばアイツはそんな名前だったかと思い出した。恐らく、この後輩が斎藤に店長とのツーショット写真を送ったのだろう。今更なんの感情も湧かない。適当に返事をする。明日には、蓮がフリーだと知った誰かが口説いてくるんだろう。

「好きだ」と告白される。そいつがどんなヤツか知らなくても、見た目がまあまあなら付き合う。そして最後には面倒になって別れる。

もう何度も何度も繰り返してきたことだ。

(好きって言われるのは好きだ。この世界に存在していいって思えるから)消費し尽くされた薄っぺらい『好き』をいくつも重ねて積み上げて、その頂点でふんぞり返るのが朝比奈蓮だ。

こんな生き方が許されるのは、蓮の美貌のおかげだ。

生まれつき薄い色素の髪と目。

笑うと甘く垂れる大きな瞳に通った鼻筋。

生まれた時からチャホヤされて生きてきたし、これからもそうやって生きていくのだろう。

「……母さんか」

震えるスマホの画面を閉じ、蓮は歩き出す。

この顔に産んでくれた母に感謝はあれど、それ以上の感情を蓮は持ち合わせていない。

ああ、顔が良ければ人生は楽勝だ。

そう思っていた。

——この数分後、自分が死ぬとも知らずに。

※※※

「……んん？」

「起きたか？」

「は？」

気づくと、辺り一面が白かった。

比喩でも何でもなく真っ白でどこまでも地平が広がっている。

あたたかくも寒くもない空間に、蓮と、謎の声の主がいた。

「だ、誰……？ てか、ここ、何処……」

「ささ、まずは茶でも飲みなさい」

「え、はあ……」

その声の主は柔和に微笑みながら、渋い色をした湯呑みを差し出した。女性のように黒くて長い髪をしているが、声は間違いなく男の声だ。

男がパンパンと手を叩くと、何処からともなくちゃぶ台が降ってきた。

茶はあたたかく、湯気が出ている。しつかりお茶の匂いまでした。

「……………」

蓮はまじまじと男の姿を見つめる。

長髪の男は、白い狩衣を纏っていた。けれど、蓮の知る時代劇の衣装とはどこか違う。

月の光を織り込んだような青みを帯びた銀白色の布地には、金糸で不思議な紋様が刺繍されていた。

男の年齢はよく分らない。蓮と変わらないようにも見えるし、もっと年上のような感じもする。

この男の整った顔には、ある種の凄みがあった。

（目だ）

そうだ。目の色が異様なのだ。

獣のような金色の虹彩をしている。

何百年、何千年という時間を見てきた者の目。

男はゆつたりとした袖の中から豪華な扇を取り出すと、いささか居心地が悪そうにはたぱたと仰いだ。

「そ、そんなに見つめられると照れちゃうのだが……」

「あん？」

蓮は眉を顰めた。

神々しいと思ったのは一瞬だけだった。

ずず、と行儀悪く茶を啜り、蓮はもう一度「アンタ誰？」と尋ねた。

男は扇を勢いよく閉じ、

「私は安倍晴明だ」

と、片目を瞑ってみせた。時が止まったような気がした。

「は？」

「だから、安倍晴明」

「あの？」

「あの」

「陰陽師の？」

「そう。よく知ってるな」

「最近サブスクで映画が解禁されたから……」

「ほう、さぶすくとな」

最も、蓮が観たのは安倍晴明の前日譚のような作品で、意地の悪い貴族に無理難題を押し付けられ、辟易している青年時代の彼ばかりが印象に残っている。

「つて、そうじゃなくて、俺は今の状況が知りたいんだって……。なあ、これ夢？ 夢だよな」

「ハハハ。夢ではない。ここは死後の世界の入り口よりちよつと現世よりの空間で……」

「ああああもうそういうのいいからもう寝かせてくれよお！ 俺は明日も大学なの！ しかも一限から！」

滔々と語り出す清明もどきから逃げるように両耳を塞ぐ。

やたらと複雑な設定の夢を用意してもらって悪いが、蓮はとにかくゆつくり寝たかった。できれば夢も見ずに、泥のように眠りたい。

「ええい、話を聞けーい！ お主は死んだの！」

「はあーん!? なんつで俺が死んでんだよ！」

「これを見よ！」

急に立ち上がった清明が扇をパチンパチンと鳴らすと、ちゃぶ台の上に古いテレビが現れた。まるでドラマで見た昭和のテレビみたいだ。

「ええと、どこをどうすればいいんだっけ」

機械の操作がおぼつかないのか、清明はあたふたしながらダイヤルを回す。

「おっ、できた！」

やけに乱れた映像は何故か白黒で、白いモヤのような物が蠢いている。

画面をじつと見つめていると、段々映像が鮮明になってきて、ようやくそのモヤが蓮だと判明した。

「俺……?」

蓮は、時折スマホを操作しながら夜道を歩いていた。

どうやらこれは今夜のバイト帰り、斎藤に殴られた後の映像らしい。

「あつ！」

——バイクに轢かれた……?

テレビには、蓮が道路に突っ伏して倒れている画像が映ってる。

コンクリートに滲み出しているのは蓮の血液だろう。

蓮を背後から追突したバイクは、一瞬停止したものの、慌てた様子もなく走り去っていく。

「てめえ……っ！ 逃げてんじゃねえよカス！ 俺が轢かれてンだろうが！ 助けろ！ 詫びろ！ 謝れ！ 俺を助けろ！」

激昂する蓮に、清明は「うるさっ」と顔を顰めた。

「おい清明！ 俺を元の世界に戻せ！ アイツとっ捕まえてボコボコにしてやる！」

「もう死んでるぞ」

「死……っ？ 死んだ？ 俺が!? バイクに轢かれたぐらいで!?」

「いや、ものすごい血が出てるし……。死ぬだろう、これは」

「納得いかねーッ」

頭を抱えて悶絶する蓮の勢いに押されながらも、晴明は辛抱強く「だから、お前は死んだんだって」と言い聞かせる。

「やり直させてくれ! こんな死に方はあんまりだ! モブに轢き逃げされた挙句、誰にも見つけて貰えずに死ぬなんて、いくらなんでも俺が可哀想だろうが!!」

「あ、ああ……。わかった……」

「なあ、アンタってすごいヤツなんだろ? やり直させてくれよお!」

「わかったって……」

「この人でなし! ……あ?」

ふと冷静になって、蓮は視線を下げた。

いつの間にか清明の胸ぐらを掴み、ブンブンと揺さぶっていたらしい。

真っ青な顔になった清明が「離してえ…」と泣きべそをかいたので、蓮はパッと手を離す。

「ぐへえ」

ぐしゃつと床に潰れた清明に馬乗りになり、蓮は腕を組んで言った。

「俺の人生、やり直させてくれるんだよなあ……？　今そう言ったよな？」

「ヒイン」

地を這うような声に、ギロリと睨みつける鋭い眼光。

どんな怨霊よりも恐ろしい蓮に、清明はもう一度「ヒイン」と泣いた。

「さつさと帰してくれ。さつさと、今すぐ！」

「あの、元の世界には帰せなくってえ……」

「あ!?　何だよ！」

「蓮くん、ちょーつと素行が悪かったじゃないですかあ……」

「素行？」

何の話だよ。と首を捻る。

「俺は確かに男女関係は爛れてたけど、酒もタバコも二十歳からだっただけ、やべえヤツとの付き合いも無かったぞ」

「その男女関係が問題なんですよ……」

「男女関係ぐらいで死刑は重すぎるだろ」

「普通の人間ならな」

やれやれと晴明は大袈裟に肩をすくめた。

「お主、自分の母方の家系を知らぬのか？」

「知らねえよ」

「神職の血筋じゃ」

「嘘だろ……？」

晴明曰く。

血はとつくに薄れ、蓮の母は一般家庭の父の元に嫁いだ。それでも稀に神の加護を受けた子どもが産まれることがあるという。それが蓮だったそうだ。

「人に愛される才能を授かったのに、お主は慈しむことをしなかった。お主が傷つけた人間の数が百に達したのが、今夜だったのだ」

「それで死んだってのかよ」

「少々過激なところがあるからのう……あの神は」

「やつぱり納得いかねー。大体、母親からそんな話聞いたことねえし」

「お主、最後に母親へ連絡したのはいつだ」

「は？」

そういえばいつだろうと首を捻る。

「覚えておらぬか」

「関係ないだろ」

「そういうところじゃ」

ブツブツと文句を言い続ける蓮の身体からやつとのことで抜け出した晴明は、調子を取り戻した口調になった。

「朝比奈蓮！ 其方はもう現世に戻ることは叶わぬ！ そして、来世は便所

虫からやり直すことになっておる！」

「べ、べん……っ!?」

蓮は都会育ちで虫の類いが心底苦手である。

ゾゾと全身に鳥肌が立った。

「イヤだあああつ！ 虫はっ、便所虫はいやだあつ」

「そうであろうそうであろう。便所虫は私ととても耐えられぬ」

「なあ、晴明様！ アンタ、すごい力を持った天才陰陽師なんだろう!? 俺を

助けてくれよお！」

「て、てんさい……」

大声で喚きながら足に縋りつく蓮に、晴明は大いに気を良くしたようだ。

「ああ、もちろん。私はお主を救うべく、此処に呼んだのだ」

「そ、そうなのかつ」

「しかし、何もなく人間に転生させることは出来ぬ」

「……罰でも受けろってか」

「ふむ……」

晴明の哀れんだような視線を受け、思わず生唾を飲む。

不本意の極みだが、神の怒りに触れたのだ。やはり何らかの罰を受けろということか。しかし、便所虫になるよりはマシだ。覚悟を決めた蓮が、そつと唇を開く。

「その、罰つてのは……」

「罰ではない。と、思う。の、だが、これは見方によっては罰よりかもしれない……」

「何だよ、ハッキリしねえな。晴明様、教えてくれよ。俺は何をしたら人間になれるんだ」

いまいちハッキリしない晴明を、蓮の淡い瞳が射抜く。

「どんなことでも受け止めるからよ」と語る瞳に背中を押され、晴明は真剣な顔をして、——言った。

「今から大正時代に行つて、母乳で悪霊を百体祓うのじゃ」

……………。

……………？

……………えっ??

ひたすら困惑する蓮。当たり前だ。

（今から、大正時代に行つて、母乳で、悪霊を、百体祓う？）

心の中で何度反芻しても意味が分からない。

ぽかんとする蓮から思いきり目を逸らし、晴明は話を続けた。

「お主を怒らせた神は乳神での。本来は温厚で気の良い神なのだが、お主の顔が昔こつぴどくフラれた男神にそれはもう瓜二つらしく……。とにかく、お主はこれから大正時代に行つて、人を傷つけた分、人を救つて徳を積むのじゃ。それがお主の禊よ」

「……………意味がわからん……………、だいたい、祓うつてどうやって……………」

「乳神が悪霊を祓う力を授けておる。それは……ぶふつ、ぼにゆつ、母乳で……っ」

「ぼにゆう？」

「ぶふーッ！ 乳神じゃからのお……っ」

晴明は肩を振るわせながら「母乳……母乳って……」と笑い続けている。
意味はわからないが、絶望的な状況だということだけは理解できた。

「あ、安心せい」

「……何がだよ」

「あちらの世界に行けば、勝手に母乳は出る」

「安心じゃない……何も安心できない……」

思わず胸の辺りを揉んでみる。当然だが何の変化もない。

「な、なんだ!？」

突如、身体が光り出した。

眩い光に目が開けられない。

「せ、晴明！」

「時間じやの」

「待て！ 俺はまだ何も理解してない！」

咄嗟に手を伸ばすも、閃光に包まれ、輪郭が溶けていった。

最後に聞こえたのは、腹が立つぐらい楽しいに告げられた死刑宣告だった。

「朝比奈蓮！ 悪霊を百体祓った暁には、また此処で会おうぞ！」

「てめえーッ！ 逃げんじゃねえ！ 一発殴らせろ！」

「えっ、怖……」

そして蓮の意識は途絶えた。

「神様お願いです。全てが夢でありますように」と祈りながら。

※※※

「うぎゃっ！」

全身を地面に叩きつけられ、蓮は勢いよく目を開けた。

頬に触れるのは湿った土の感触。先程までは真っ白な空間にいたが、今度は真っ暗闇の世界だ。街灯もなにもない真夜中の山中に蓮はいた。

「いつてえ……。ん？」

痛む腰を押さえながら身体を起こそうとして、違和感に眉を顰める。

胸元が妙に冷たい。服が濡れていた。

「へ？」

反射的に胸元へ手をやる。指先に触れたのは、生温かい液体だった。

「……………」

嫌な予感がした。

恐る恐る指を見る。白い液体で濡れている。

その上、独特な甘い匂いがした。

「は？」

もう一度見る。

白い。

「は？？？」

瞬間、清明の言葉が脳裏によみがえった。

『あちらの世界に行けば、勝手に母乳は出る』

「マジで出てるじゃねえかあああああッ！」

絶叫は森中に響いた。

事前に聞かされていたとはいえ、あまりにも突拍子もないことが続きすぎた。何なんだ今日は。厄日か。大厄日か。いやむしろ命日か？

落下した時の痛みのせいで夢だと疑うこともできない。この痛みは現実だ。だって身体のいたるところが痛すぎる。

「なんなんだあの清明ってヤツは！　もうちょつと優しくしてくれても良いじゃん！　しかもここはどこなんだよ！　山？　森？　せめて街に連れてつてくれよ！　ギャーッ！　何かいる！」

蓮の大声に野生動物が驚いたのか、背後で何かが動く音がした。

「ち、ちちち近づいてくる！　ウワーッ！　熊!?　熊なのか!？」

物音がどんどん大きくなっている。

恐怖で足の力が抜けた蓮は、せめてもと頭を抱えてうずくまった。

「せつかく生き返ったのに、熊に喰われて死ぬなんてイヤだ！　どうせなら怖くない方法で殺してくれ！」

パニックになった蓮が叫んだ。

ざり、と背後で草を踏む音がした。

「――動くな」

低い声と同時に、首筋へ冷たい感触が触れる。

「へっ……?」

蓮は凍り付いたまま、視線だけを恐る恐る動かした。

（刀だ）

本物の刀なんて見たことはないが、少しでも動けば、容易く皮膚を裂くだろうと本能で理解した。

「ゆつくりと此方を向け」

男の声は刀の切っ先のように鋭利で、逆らうことなどできなかった。

じりじりと振り向くと、月光が木々の隙間から差し込んでいた。

逆光の中に男が立っている。

黒い軍服。

抜き身の刀。

顔はよく見えない。

だが異様だった。

人間が人間へ向ける殺気じゃない。

「貴様は何だ」

男の声には警戒と困惑が混じっていた。

「え？」

「悪霊ではないな。人間か？」

途切れた雲間から月が現れる。ようやく男の顔が見えた。

「……………！」

整っているとか美形だとか、そんな言葉では足りない。

自分の容姿に自信のある蓮ですら見惚れるほど美しい男だった。

しかし、蓮の目を引いたのは顔ではなく、その瞳だった。

夜より深い漆黒の瞳は、灰青い光を底に沈めているようだ。

感情の読めない冷たい眼差しに睨まれると、心臓を直に掴まれたかのように身体が硬直した。

そんな男の瞳が、僅かに見開いていた。

男は蓮の顔ではなく、胸元を凝視している。

「な、何見てんだよ」

思わず服を押さえた。手のひらがぐつしよりと濡れて、また母乳が出たのだとわかった。

男は数秒沈黙し、

「乳が出ているぞ」

と真顔で言った。

「知ってるわ！」

蓮は堪らず叫び返した。

改めて他人から指摘されると恥ずかしくて仕方がない。

男は眉ひとつ動かさないまま、こてん、と首を傾げた。

「何故だ」

「俺が聞きてえよ！」

「お前は男だろう」

「だから俺も混乱してんだよ!!」

数秒の沈黙。やがて男は刀を下ろした。

そして疲れたように目元を押さえる。

「……頭が痛い」

「奇遇だな。俺もだ」

ふたりは初めて同じ気持ちになった。

「つつ……!?!」

胸がずくん、と痛んだ。

思わず胸を押さえると、手のひらに乳が滴り落ちる。

「いつて……っ、ンだ、これ」

「どうした」

「なんか、胸が痛い……っ!?!」

「!」

胸を押さえて疼くまる蓮の背後から、得体の知れない黒い影が伸びた。

瞬時に蓮から距離を取った男の視線は、冷静だったが、険しいものに変わっていた。

『げげげ。げギャ、ギャ……』

耳元で声があった。そう、これは声だった。

蓮を嘲笑うかのような声に、脳みそをヤスリで削られたかのような不快感が背筋を這い上がる。嫌悪感と恐怖。全身が硬直して振り向くことができない。

「ひあ……っ」

ぬるり。

背中に粘着質なものが絡みついた。

スライムに似た冷えた感触が、ぐねぐねと蠢きながら蓮の身体中にまとわりつく。

「っ、ああ」

大声で叫び出したい。しかし、喉の奥からは絞り出すような掠れ声しか出てこない。

「おい、お前！ 不用意に動くなよ」

「えっ……うわっ！」

男が上体を低く下げたと同時に、黒い何かに斬りかかった。

銀の閃光が眼前で弾け、蓮は強く目蓋を閉じた。

『ゲびゃあああ』

背後から叫び声が聞こえたが、瞬時に、地から湧き上がるかのように黒いドロドロが溢れていく。

「ば、化け物……っ」

思わず振り返った蓮は、見てしまった。自分に纏わりつく怪異を。

その姿は『化け物』としか言いようがなかった。

黒い粘液に塗れた泥は自由自在にかたちを変え、人間の腕や触手をいくつも作り出している。先程男が斬り捨てたのは、そのうちのひとつなのだろう。

恐怖に慄く蓮を、ふたつの胡乱な目が捕らえた。

「うぐ……っ!?」

人間の手を模した泥が蓮の口の中に侵入した。

人ではない指が蓮の齒列を割り、舌先を引つ張り出す。

「ふっ、う、んんっ！」

泥が口内で変形し、一本の棒状のものに変わる。ぐぼっぐぼつと喉奥を突かれ、蓮は目に涙を浮かべて抵抗した。

呻きながら足をバタつかせると、反対に押さえ込まれてしまう。

（苦しい……っ、気持ち悪い……っ）

考えたくもないが、この泥は、フェラチオに似た行為で快感を得ているようだった。

愉悦で全身を震わせながら、蓮の服の隙間から泥の手を入れてきた。

「うえ……っ！ げほっ」

ズルリと口内から異物が出ていき、ようやく息ができた。

げほげほと何度も咳き込む蓮の素肌を無遠慮な手が撫で回す。

『あきやキャキャ』

「や、めろ……っ」

おかしい。蓮は自分が今自覚している感覚にパニックを起こしていた。

（こんな、化け物に触られて、なんで……っ）

泥が触れたトコロから、ぞくぞくと甘い痺れが走る。はあ、と熱っぽい息が漏れ、身体を中心に信じたくない疼きを感じた。

「あ、あっ……」

気持ちいい筈がない。こんなおかしい。

化け物の指が背筋をなぞり、蓮は自分のココが性感帯だったことを初めて知った。

「見るな……っ！」

蓮の痴態を、男は刀片手に呆然と立ち尽くして凝視していた。

羞恥心に涙を零しながら叫んだ蓮に、ようやくハッ和我に返った男は、思い出したかのように刀を何度か振るった。

「くそ……ッ」

男は悔しそうに毒づいた。小枝を切るように泥は簡単に切れるが、瞬きの

間に再生してしまう。

単純に刀との相性が悪いのか。他に何かの要因があるのか。蓮にはわからないが、男は明らかに攻めあぐねているようだった。

「やめろっ、何すんだよ……！ 離せ！」

ぬるぬると動く泥が蓮の服を剥ぎ取っていく。

下着ごとスラックスを下され、下半身が露わになった。

「やつ……！」

泥の手が、蓮の足を大きく開かせた。

蓮の恥ずかしいトコロを、目の前にいる男に見せつけるかのように。

屈辱と羞恥に全身が燃えるように熱くなった。

「あうっ、……ふ、んんっ、や、めろ……っ！」

硬くなり始めた芯に泥の手が伸びる。

ゆるゆると扱かれ、いよいよ蓮は泣きたくなる。こんな化け物の手が気持

ちいいなんてどうかしている。

それなのに、蓮の感情を無視して、身体はどんどん快楽を拾い上げていった。

「な、んで……っ、おれ、ああ、ン……」

下半身からくちゆくちゆと卑猥な音がする。

黒い泥に透明の先走りが混ざった音だ。

『あ。ア。ああ』

背中にへばりついていた泥が剥がれ、空中に集まっていく。

しゅるしゅると衣擦れに似た音を立てながら、泥は膨らんだり凹んだりしながらかたちを変えた。

(男……?)

一点に集束した泥は、小太りの男の姿に成った。

五十代ぐらいに見える男は、目の玉を時計の針のようにグルグルと回転させ、やがて、蓮をぎよろりと見下ろした。

その目は胡乱なまま、それなのに、はつきりと欲だけは滲み出ている。

『ハー、あはハ』

化け物は、体毛やだらしのない腹のライン、屹立した醜惡な男性器まで精巧に作り出していた。

「あ……っ！」

辛うじて残っていたシャツを乱暴に捲り上げられた。

むわつと甘いミルクの香りがして、蓮はたまらず目線を逸らす。

「っあ！ やあつ、ん、くう……っ」

性器を下から掬うように揉まれ、上半身をくねらせる。

カパア……と開いた化け物の口の中から、血のように真っ赤な舌が伸びた。

「やつ、やだつ、ソコは」

化け物の舌先が狙うの是一片、乳が滴る蓮の乳首だ。

おかしなことに、蓮の全身は普段より敏感になっている。

こんな状態で乳首に触れたらどうなるかわからない。

「う、」

化け物のくせに興奮しているのか、湿った息が胸にかかる。

それだけで背筋が震えた。

「ああっ！」

じゅう、と乳首が吸われた。

頭の中から痺れが走って、蓮は身体を逸らした。

『ギャッ、ああアアッ!!』

化け物の悲鳴を掻き消すような爆音が轟く。

泥の身体のうちちが膨れ、膨張に耐えきれずに爆発する。

「うわっ」

「じっとしている」

宙に放り出された蓮の身体を、傍観していた黒髪の男が抱き止めた。

軍服の上着を肩にかけ、蓮を庇うように前に立って崩壊していく泥の化け物を睨みつけている。

『ア、アア……』

やがて、爆発が止まり、塵となった泥が風に攫われて霧散する。

安堵の息を吐いて刀を仕舞った男が、膝をついて頭を下げた。

「助けられなくてすまなかった」

「え……」

「お前と出会う前の戦いで靈力を使い果たして……、いや、言い訳だ」

男はもう一度「本当にすまなかった」と言つて頭を下げた。

令和の世界に生きていた蓮は今日、バイクに轢き逃げされて死に、安倍晴明に会つて大正時代にタイムスリップして、たった今――。

(母乳で、化け物をやつつけた……!?)

ふうーつと意識が遠のいていく。

「おい、大丈夫か!？」

男の焦った声を聞きながら、蓮は、意識を失った。

第二話 榊原朔臣という男。その一

精神的なショックのせいかな、蓮は夢と現の狭間を何度も行き来していた。身体は重く、指一本を動かすことすら億劫だ。

蓮は見知らぬ屋敷の一室に寝かされていた障子の向こうを、様々な人が切迫した様子で通り過ぎていく。

「……負傷者は……で、どこに……」

「今回の作戦……掃討数は過去最高の……」

聞こえてくるのは若い男の声が多かったが、時折女性の声も混ざっていた。
(……ん)

音もなく障子が開いた。足音はほとんどしない。

遠慮がちに触れた手が額にあつた布を取り替えてくれた。冷たくて気持ち

がいい。

「……すまん、起こしたか？」

「おれ……生きて……る……？」

「ああ」

男は、蓮がこちらの世界に来たときに出会った黒髪の男だった。

暗がりの山中でも思ったが、明るいところで見ると、男はやはり美しい容姿をしていた。

「水を飲むか？」

「あ、うん……」

男に背中を支えてもらいながら身体を起こし、ぬるい水を飲む。
久しぶりに水を飲んで、やっとひと息ついた。

「なあ、一応聞くけど、あのドロドロした化け物って本物？」

「悪霊のことか？」

その返答で、あの出来事が夢ではないと理解してしまう。

「ああ、マジかあ……。もう一個聞くけど、今って大正？」

「そうだが……」

隣の男から「コイツ頭でも打ったのか」という視線を感じる。

（そうか。アレは現実か。そしてココは大正で、あの化け物は悪霊で、俺の母乳で祓ったんだな）

ひとつひとつの事実を指折り数えて、ピタリと止まる。

母乳。

母乳……？

「俺のおっぱい……!!」

「!?」

ガバーツと浴衣の前を開け、自分の胸を確認する。

そこにあつたのは、大人しく鎮座する蓮のさくらんぼがふたつ。

「出てない……」

ほ。と息を吐いた。

蓮の胸から母乳は出ていなかった。

死んだことと大正時代に飛ばされたことは事実でも、母乳が出るようになったことだけは夢だったのかも？　そう思い込もうとした蓮に、男は無慈悲に告げる。

「昨日までは乳が出ていた。悪霊を祓ったら止まったようだ」

「あ、そう……」

ガクリと肩を落とす。

そんな蓮の顔を、男はまじまじと見つめた。

「なに？」

「いや……」

男の視線に気づいて目を合わせたが、素っ気なく逸らされてしまった。

「そういや、名乗ってなかったよな？　俺は朝比奈蓮」

「あんなに可愛らしい男
榊原朔臣だ」

「おお、大正っぽい名前だな。知らんけど」

「なんだそれは」

「や、こつちの話」

榊原朔臣と名乗った男は、気を悪くした様子もなく、無表情のままだ。

伶俐な美貌も相まって、表情の乏しいところが氷みたいに冷たく見えた。

「何故あんなところにいた。大掃討のお触れは出ていただろう。しかも、お前がいた場所は立ち入り禁止区域だ」

「え、あそこ入っちゃダメだったの？」

「ああ。だから警戒したんだ。悪霊の中には美しい人間に化けて人に憑くものもある」

それで刀を突きつけられたのかと、昨夜のことを思い出して背筋が寒くなった。

思わず腕を摩っていると、廊下をバタバタと走る音が聞こえた。

「榊原隊長！ 火急の要件につき、失礼いたします」

「なんだ」

勢いよく障子が開かれ、短髪の男が現れた。

精悍な顔つきをした男の右眼には古い傷跡があった。

「結界をすり抜け、何処からかこの書状が届きました」

「封じの呪まじないか」

「はい。しかも、裏に……」

「あつ！」

蓮が声を上げた。

手紙の裏にあの忌々しい『安倍晴明』という文字が綴られていたからだ。

朔臣が目で合図を送り、短髪の男は障子を引いた。

閉める瞬間、指で何かのかたちを作って空を切り、小声で「閉」と唱える。

「——開封」

朔臣がそう唱えると、書状がふわりと宙に浮いた。

瞬く間に白い紙が空気に溶けるように消え、文字だけが浮かび上がる。

『朝比奈蓮は私、安倍晴明に縁ある者。加護の力を持って悪霊百体を祓わせ

よ。さもなくば』

「さもなくば、来世は便所虫確定……だと!? あんの、クソジジイ〜!」

ふぎけんじゃねえ! と叫ぶより先に、短髪の男が腰を抜かしてへたり込んだ。

「た、隊長……今のは本物、ですよね……?」

「ああ……間違いない」

「自分が生きてる間にこのような奇跡が起きるとは……」

「武田、落ち着け。……いや、正直俺も驚いている」

「待て待て、反応違うね? その加護の力って母乳なんだけど? お前それでもいいの?」

短髪の男——武田と朔臣は、興奮が抑えられない様子で話し込んでいる。

蓮にとつてはとんでもないヤツだった晴明だが、このふたりには崇拜の対象なのだろう。

「加護が何であれ、安倍晴明様が認めたことに変わりはありません」

「いやいや、変わるだろ！ 母乳だぞ!? もつとこう、『うわあ……』とかないのかよ!」

「俺は目の前で蓮が母乳で悪霊を祓った現場を目撃した。珍妙な術だが、悪霊が祓えるなら手段は問わん」

「大正って懐深えな。深海かよ」

下手したら当事者の蓮よりも状況を飲み込んでいる。

晴明がわざわざ手紙を送ってきたということ、この得体の知れない連中が蓮の助けになると知ってのことなのだろう。

偶然なのかもしれないが、拾われたのが朔臣でよかったと蓮は少しだけ安堵した。

「しかし……」

「ああ……百体か……」

力が抜けて平静に戻りつつある蓮に対し、ふたりの顔色はあまり良くない。武田に至っては額を押さえて唸っている。

「なあ、朔臣たちは悪霊を祓う仕事してんの？」

「そうだ」

「今の晴明の手紙って、俺を手伝ってやれってことだよな？」

「ええ、その通りかと」

「なんでそんなテンション低いの？」

面倒事を抱え込んでしまっただけで辟易としている、というわけでも無さそうだが、事態が飲み込めていない蓮に、武田が困り顔のまま口を開いた。

「我々は帝都鎮霊局に所属し、貴方が昨夜遭遇した悪霊を祓う勤めを請け負っています」

「この時代って、あんな化け物がウロウロしてんの？」

「はい、なので我々は市中の警護をしながら、悪霊を発見次第祓いをして平和を守っています」

「じゃあ、俺がその仕事の手伝いをすればいいってことだよな」

化け物退治なんて全く気は進まないが、便所虫になるよりはマシだ。

それに、ひとりで戦うよりも、武田のような屈強な人間と一緒に心強い。

「その、とても言いにくいのですが……」

「なんだよ」

「実は……」

言い淀む武田を遮ったのは、朔臣だった。

「もうほとんどの悪霊を祓ってしまったんだ」

「はい？」

「昨日、お前がいた山は一年に一度大量の悪霊が生まれる霊山だ。取り逃すと帝都に降りてきて禍いをもたらすから、発生する日に合わせて大規模な掃討作戦を行う」

「てことはつまり……」

「つまり、昨晚で大体の悪霊は祓った」

次はまた来年だな。と、若干哀れんだ表情で朔臣は言った。

「おい……」

蓮が元いた世界ならともかく、大正の世であと一年も過ぐすのは酷すぎる。

「け、けど、全く悪霊が発生しないわけではありませんから」

「はは……いちねん……」

武田の励ましも、今の蓮には届かない。

パパッと百体祓ってさっさとこの世界からオサラバ作戦はもう不可能だ。
そうになると、現実問題が見えてくる。

「……俺、これからどうやって生きていけばいいの？」

「帰る場所はないのか」

「あるわけないだろ。異世界転移だぞ」

聞き慣れない言葉に、朔臣と武田が顔を見合わせた。

「安倍晴明様からの御神託があつた以上、局で預かるしかありませんね」

「幸い、寝泊まりできる部屋は確保できそうだな。局内なら不測の事態にも
対応できるだろう」

「なあ、それって保護？ 監視？」

「保護ですよ」

嘘だ。武田の目にはしつかり『監視』と書いてある。

「他のヤツらにまた一から説明すんのもダルいし、その方がいいかもな」

「それでは、私は朝比奈さまの部屋の手配をして参ります」

「ああ、大仕事の後で悪いが頼む」

武田が立ち上がり、障子に手をかけた瞬間、けたたましい鐘の音が鳴り響いた。

『悪霊出現！』

『霊力のある者は急ぎ迎え！』

知らない男の声が頭の中で直接響いた。

どうやら、この声が聞こえたのは蓮だけではないようだ。

武田と朔臣が緊迫した表情になる。

「そんな馬鹿な！ 昨日掃討したばかりだというのに！」

「武田、行くぞ！」

「はい！」

「あ、おい！ 待てよ！」

駆け出していったふたりの後を追う。

「なあつ、武田さん！ アイツ、大丈夫なのかよ！」

「何がです？」

「昨日、俺が悪霊と遭遇した時、朔臣のヤツ全然敵わなかったんだぜ？ 弱いんじゃないの？」

朔臣は何だか偉そうにしているが、線の細い彼と違って、見た目だけなら武田の方がよっぽど強そうだ。

「何を言っているんですか。昨晚出現した百余りの悪霊のほとんどを祓つたのは榊原隊長ですよ」

「嘘だろ!？」

「その証拠に、貴方と遭遇した時、隊長の霊力は空っぽだったのではないですか？」

「そう、だったのかも……」

そういえば、朔臣自身も「霊力が尽きた」というようなことを言っていた。つまり、朔臣は、あんな恐ろしい悪霊を百体祓った直後に、蓮を助けに来てくれたということだ。

「アイツめちやくちやいいヤツじゃん……」

「彼の方は天才除霊師であり、帝都鎮霊局隊長・榊原朔臣さまです」

武田の横顔はどこか誇らしげだった。

複雑に曲がる廊下を走りながら、朔臣はすれ違う局員にあれこれと指示をしていた。

その声を頼りに、蓮も必死になって追いかけた。

「うわっ……!!」

外へ出ると、既に人が集まっていた。

武田と同じ服を着た男たちの中には、昨日の掃討作戦で怪我を負った者も多かった。

人の渦の中心には、昨晚と似た黒い泥が蠢いている。

気味が悪い姿ではあるが、昨日の悪霊ほど大きくはない。

「っ……！」

悪霊の姿を捉えた瞬間、蓮の胸に痛みが走る。

昨日と同じ痛みだ。ずくずくと痛む胸を押さえると、浴衣に乳が滲み始める。

（なんで……！）

力が抜けそうになる足をなんとか奮い立たせ、悪霊に近づいていく。

「なんだこの匂いは……」

「武田さん……」

「朝比奈さま!? 一体どうされたのです」

「はは……だよね」

男が胸から乳を出していたら、そりゃあ「一体どうされた」だよな、と苦笑するしかない。

「それが加護ですか？」

「うん、そうみたい……」

「これは……なんというか、珍妙ですね」

「だね……」

力無く頷くしかない。

「隊長！ 幸いなことに、悪霊は低級のようにですし、我々がある程度まで弱らせ、トドメを朝比奈さまにお願いしてはいかがでしょうか」

蓮が感じた通り、やはりあの悪霊は大したことがない。

武田の進言は、戦い慣れてない蓮にとっても有難いものだった。

「蓮、いけるか？」

「……やってみる」

朔臣の静かな問いかけに頷きを返す。

「貴方様は私が必ず守ります。合図があるまで近寄らないでください」
頼もしい言葉とともに武田が両手を強く叩く。

合わせた手のひらを開くと、暗闇を照らす真つ赤な炎が現れた。

「なんだよソレ。めちやくちやカッコいいじゃん！俺も手から火を出したり光る剣で戦いたいよお！」

このくらいのボヤキは許してほしい。

剣を抜いた朔臣が刀身に指を這わせると、内側から銀色の光を放つ。

昨晚、朔臣の刀は鈍色をしていたから、霊力が尽きていたのは真実だったようだ。

いや、今はそんなことはどうだっていい。

「光る剣もあるのかよ!!俺もそっちが良い！」

「お前はさつきから何を言っているんだ。危ないから離れていろ」

「これが悔しいって感情か……!!」

ルックスが良く、運動神経は悪くないし、勉強もそこそ出来た蓮は、これまで人を羨んだり妬んだりしたことがない。

それが今は、他人が羨ましくて仕方ない。

蓮のような刀で、武田のような炎の拳で、いや、もうその辺で突っ立っている地味な局員が持っている護符でもいい、頼むから変えてくれと心底願った。

「クソオ……！」

ガクウと膝をつくとき、嫌味のように母乳が滴り落ちる。

なんだこの力、マジでいらない。

『オオオオオオオオ！』

悪霊の咆哮が空気を一変する。

全身が沸騰するかのようにボコボコと歪に膨らみ、いくつもの目が一斉に開いた。

「ひっ……」

不気味な姿に、蓮はか細い悲鳴を上げた。

先程までとは全く違う気配だ。

無数の目は真っ白に濁っていて何処を見ているのかわからない。

それなのに、蓮は痛いほどの視線を感じた。

『グオオオオオッ!』

悪霊は一目散にこちらへ向かってきた。

恐ろしいスピードで迫ってくる悪霊の姿に気圧され、蓮の足は地面に縫い止められたかのように動かない。

「蓮!」

鋭い閃光とともに悪霊の姿が真つ二つに裂けた。

断面から腐臭がして、蓮は吐き気を堪えた。

「榊原隊長! この悪霊はどう見ても下級程度の霊。それが、朝比奈さまを視認した途端、明らかに力が増したように見えました」

「蓮の加護に引き寄せられているのではない」

「では……」

「明らかに、朝比奈蓮を狙っている」

炎の拳で悪霊を退けた武田と朔臣の背中に守られながら、蓮は再生してい

く悪霊を食い入るように眺めた。

「な、なあ……呑気に話してる場合じゃないって……！ あの花け物、再生してんじゃん！」

「蓮、昨日は情けないところを見せた。お前にはもう指一本触れさせん」

朔臣はゆつくりと刀を振り上げ、夜風に乗せるように刃を巡らせた。

その動きはひとつも無駄なく、神に捧げる舞のように優美だった。

「――掛けまくも畏き天津神」

刃が夜闇を切り裂いた。

銀光が重なり、夜空に幾何学模様の軌跡を残していく。

こんなに美しい光景を、蓮は生まれて初めて見た。

「禍いを断ち、穢れを祓いたまえ」

最後の一步とともに刀を振り下ろす。

刃から膨大に溢れた銀光が悪霊を包み込み、闇そのものを裂いた。

「……っ」

目を焼くような閃光に強く目蓋を閉じる。

「……しまった」

光が収まり始めた頃、朔臣の静かな声が聞こえた。

「ん……？」

視界はまだ薄ぼんやりとしていたが、小走りをする朔臣の後ろ姿が辛うじて見える。

「蓮、すまない。やりすぎた」

「うげっ……」

そつと差し出された両手には、悪霊の目玉とほんの少しの肉片が乗っていた。あまりにもグロテスクな物体は、信じられないことに恨み言のようなのを吐いている。

「あーあ。隊長、張り切っちゃったんだな」

「昨日良いとこ無しだったんだろ？ そりゃあんな美人の前じゃ力も入るか

……」

「いや、やりすぎだろう」

蓮と朔臣を遠巻きに見ている隊員たちから、コソコソと声が聞こえる。

なんだか居た堪れないのは蓮だけで、朔臣は手に悪霊を乗せながら、何故かしょんぼりと肩を落としている。

「あの、朝比奈さま」

「武田さん、これどうしたらいいの？」

遠慮がちに声を掛けてきた武田に、蓮は縫るような目で訴えた。

「今ならまだ間に合うかもしれないので、念のため悪霊を祓っていただいてもよろしいでしょうか？」

「でもさあ。ほぼ死にかけてんじゃん。数にカウントされるのかなあ」

「申し訳ありません。このままでは隊長があまりに不憫なので……」

「うーん、武田さんがそこまで言うなら……」

蓮がゴソゴソと胸の辺りを寛げると、武田はさつと視線を逸らして背中を向けた。

これから蓮がする行為を慮つての行動だろう。

蓮の武田に対する好感度が著しく上がった瞬間だった。

「よいしょ」

びゅーつと乳を搾つて悪霊にかけると、

『アアア』

と小さな悲鳴を上げて霧散していった。

これで本当に二体目にカウントされるのかわからないが、きつとやらないよりマシだろう。

その光景を遠巻きに見ていた隊員たちから「おーっ」と感嘆の声が上がる。

「本当に乳で祓ったぞ」

「やはりあの方は女なのか？」

「いや、男に間違いないらしい」

……ぷっちーん。

あんまりな言い草に、蓮の堪忍袋の尾が切れた。

「なんだテメェら!! 見せもんじゃねえんだよオ!!!」

蓮の怒声を掻き消すように、鐘の音が喧しく鳴り響いた。

驚く間も無く、ひとりの隊員が血相を変えて駆け込んでくる。

「報告! 西区に悪霊出現!」

武田が凜々しい眉を顰める。

「西区……?」

さらに、別の隊員が息を切らしながら飛び込んできた。

「北区でも悪霊を確認!」

「南区からも応援要請です!」

そんなはずはない。この場にいる誰もがそう思った。

昨晚の大規模な掃討作戦で、百体を超える悪霊を祓った現場を、此処にいる隊員たちは自分の目で見たのだ。

悪霊たちが祓われる瞬間を一番近くで見続けた武田は、険しい表情で呟いた。

「こんなことは……あり得ません」

朔臣は悪霊の出現地点を確認すると、即座に指示を飛ばした。

「現場は第一班に任せる。武田、蓮を連れて局へ戻るぞ」

「はい」

帝都各地で異変が起きている以上、まず状況を整理する必要があつた。

※※※

慌ただしく局へ戻る頃には、空はすっかり朝を迎えようとしていた。朔臣と武田の後を追ひ、蓮は帝都鎮靈局へ足を踏み入れた。

「うわ……」

外から見た時も大きな屋敷だと思つたが、中は想像以上だった。

長い廊下が幾重にも伸び、天井には古びた梁が走る。

柱には見たこともない札が何枚も貼られ、それが異様な雰囲気を出していた。

「負傷者を医務室へ！」

「結界班は北棟へ急げ！」

慌ただしく行き交う局員たちは、皆同じ黒色の隊服をまとっている。腕を吊つた者。

包帯で頭を巻いた者。

血の滲んだ隊服のまま歩く者。

昨夜の掃討作戦が、どれほど過酷だったのかが嫌でもわかる。

壁際には大小様々な刀が整然と並べられ、そのどれもが普通の刀とは違う淡い光を宿している。

隣の部屋を覗けば、若い隊員が護符を書き続け、別の部屋では数人が巨大な陣を床へ描いていた。

「ここ全部、悪霊退治のためなのか……」

まるで映画の撮影所だ。

いや、それよりもっと現実味があって生々しい。

此処にいる者は皆、命懸けで悪霊と戦っているのだ。

「朝比奈さま」

武田と呼ばれ、蓮は我に返る。

「こちらです」

案内された先には、大きな机の上へ帝都全域の地図が広げられていた。

部屋の空気は、廊下以上に張り詰めている。

蓮も無意識に背筋を伸ばし、会議室へ足を踏み入れた。

隊員たちは、慌ただしい報告を受けるたび、地図へ赤い印を打っていた。

西区。

北区。

南区。

東区。

帝都を取り囲むように印は増えていく。

地図の形には見覚えがあった。

「東京？」

地図を見る限り、帝都は現代の東京そのものだった。

「これ……」

蓮と同じ違和感を武田も感じていたのだろう。息を飲む音が聞こえた。

「悪霊は昨日掃討したばかりの霊山ではなく、市街地で発生しています」

それは、誰の目にも明らかだった。

朔臣は地図から目を離さず、静かに口を開く。

「これは自然発生ではない。誰かが意図的に悪霊を生み出している」

隊員の重い沈黙が蓮の両肩に伸しかかった。

張り詰めた沈黙の中、誰もが無意識に蓮へ視線を向けていた。

「……え？」

その視線だけで十分だった。

「もしかして、」

おずおずと声を出すと、胸の奥の騒めきが一層強くなった。

「俺が来たせいじゃ……」

痛みをこらえるような蓮の表情に、武田は言葉を詰まらせる。

「それは……、」

「断定はできない」

凜とした声に、蓮は顔を上げる。

切れ長の美しい瞳は真っ直ぐに蓮を見据えていた。

「だが、お前を狙って悪霊が活性化したのは事実だ」

武田も神妙な表情で頷く。

「朝比奈さま、原因は必ず突き止めます」

自分ひとりでは何も出来ない無力さに、蓮は唇を噛み締めた。

そんな蓮の肩にそつと手を置き、朔臣が局員たちを見渡す。

「朝比奈蓮は、本日より鎮靈局で保護する。異論がある者はいるか」
「反対する者は誰もいなかった。」